

## 第4章 ライティング評価基準や既成の言語能力枠組みにおける結束性

### 4.1 ライティングの評価基準や言語能力枠組みの実例

第3章では、言語能力のモデルにおける結束性の位置づけについて述べたが、ここでは、ライティング能力全般と文法的結束性の関係を見るために、既成の標準化されたライティングテストの評価基準や言語能力枠組みの中に、文法的結束性に関わる要素がどのくらい組み込まれているかを概観することとする。テストの評価基準や言語能力枠組みに、接続、指示、代用、省略に関わる指標が存在すれば、文法的結束性がライティング能力に関わっているとと言えることになり、文法的結束性の観点から英語学習者の作文を検証する意義が高まることになる。

#### (1) ESL Composition Profile (Jacobs et al., 1981)

まず、最初に取り上げるのは、日本におけるライティング研究で多く利用されてきた ESL Composition Profile (Jacobs et al., 1981) である。この評価基準は、content、organization、vocabulary、language use、mechanics の5つの項目からなる分析的評価方法である。その中で、結束性に関わる項目は、表4.1のとおり、organization と language use の記述の中に見られる。

organization 中の記述には、論理的な配列展開 (logical sequencing) の基準があり、その下位項目に適切な接続表現 (appropriate transitional markers) の使用に関する記述があるが、結束性は論理的な文章展開の絶対条件にはならないことから、ここでの「適切さ」とは、単に接続表現が多く見られることではないことが容易に想像がつく。つまり、文法的あるいは語彙的な結束性がなくても、内容的に一貫した文章を書くことは可能であることから、この論理的な配列展開はどちらかと言えば統括性 (coherence) に関わる観点と見なすことができる。実際に、下位項目の最初の記述は、時系列などの特定の流れに沿って内容が論理的に展開しているかどうかという基準である。このように統括性という観点から各レベルにおいて、論理的な配列展開に関する基準が示されているが、最上位のレベル (Excellent to Very Good) になって、結束的である (cohesive) という条件が初めて現れる。それでは、この上位レベルの学習者が見せる高い結束性とはどのようなものであろうか。cohesive の観点の下位項目には、Does each paragraph reflect a single purpose? と Do the paragraphs form a unified paper? という2つの記述が見られるが、この2つは、その記述から判断する限り、Halliday and Hasan (1976) の定義に見られる「接続」や「指示」という文法的なつながりではなく、どちらかと言えば、意味的なつながり、つまり統括性に関わる観点であると思われる。この cohesive という観点は最上位 (Excellent to

Very Good) の記述にしか見られないため、このレベルになると、具体的な接続あるいは指示に関する表現の使用の有無が評価基準になるわけではなく、書かれたテキストが結束的(cohesive)であることを前提として、全体的に意味的にまとまっているかが作文評価の基準になっていると想像することができる。

language use の基準では、結束性に関わる要素は、主に冠詞と代名詞であるが、この記述から判断すると、ライティング能力が上がるにつれて、これらの誤りが減少していくことがわかる。

表 4.1 ESL Composition Profile の基準

	Level	Criteria
Organization	Excellent to Very Good	●fluent expression ●ideas clearly stated/supported ●succinct ●well-organized ●logical sequencing ●cohesive
	Good to Average	●somewhat choppy ●loosely organized but main ideas stand out ●limited support ●logical but incomplete sequencing
	Fair to Poor	● non-fluent ● ideas confused or disconnected ●lacks logical sequencing and development
	Very Poor	● does not communicate ●no organization ●OR not enough to evaluate
Language Use	Excellent to Very Good	●effective complex constructions ●few errors of agreement, tense, number, word order/function, <u>articles</u> , <u>pronouns</u> , prepositions
	Good to Average	●effective but simple constructions ●minor problems in complex constructions ●several errors of agreement, tense, number, word order/function, <u>articles</u> , <u>pronouns</u> , prepositions but meaning seldom obscured
	Fair to Poor	●major problems in simple/complex constructions ●frequent errors of negation, agreement, tense, number, word order/function, <u>articles</u> , <u>pronouns</u> , prepositions, and/or fragments, run-ons, deletions ●meaning confused or obscured
	Very Poor	●virtually no mastery of sentence rules ●dominated by errors ●does not communicate ●OR not enough to evaluate

## (2) EFL Composition Profile (Nakanishi, 2006)

次に、(1) の ESL Composition Profile を日本人英語学習者向けに改良した EFL Composition Profile (Nakanishi, 2006) を見てみる。この基準は ESL Composition Profile 同様、content、organization、vocabulary、language use、mechanics の 5 つの項目からなる分析的評価方法で

あり、表 4.2 のとおり、organization の中に接続表現の適切な使用に関する記述があり、また、language use の中に、冠詞や代名詞という指示表現に関わる要素が組み込まれている。この評価方法でも、文法的結束性の高い文章が、良いライティング評価を受けることになることがわかる。

表 4.2 EFL Composition Profile の基準

Criteria	Checklists
Organization (1-5)*	Does a draft have a topic sentence?
	Does a draft develop based on the topic sentence?
	Are <u>logical connectors</u> used appropriately?
	Is the order of a draft appropriate?
Language Use (1-5)*	Is grammar (subject-verb agreement, tense, numeral, <u>article</u> , preposition, <u>pronoun</u> , and <u>reflective pronoun</u> ) accurate?

\* 5: Excellent / 4: Very Good / 3: Average / 2: Fair / 1: Poor

### (3) TEEP Attribute Writing Scales (Weir, 1990)

そして、次に、英国留学のために非英語母語話者が受験するテストである TEEP (Test of English for Educational Purposes) の Attribute Writing Scales (Weir, 1990) を参照する。この基準は、7つの下位項目において、それぞれ0~3点のスコアを持つ分析的評価方法であり、表 4.3 のとおり、cohesion が7つの下位基準のうちの1つとなっている。

表 4.3 TEEP Attribute Writing Scales の cohesion の基準

score	criteria
3	Satisfactory use of <u>cohesion</u> resulting in effective communication.
2	For the most part satisfactory <u>cohesion</u> though occasional deficiencies may mean that certain parts of the communication are not always effective.
1	Unsatisfactory <u>cohesion</u> may cause difficulty in comprehension of most of the intended communication.
0	<u>Cohesion</u> almost totally absent. Writing so fragmentary that comprehension of the intended communication is virtually impossible.

なお、後述する Common European Framework of Reference for Language (CEFR) の基準で B1 以下の学習者は、英語の能力レベルがまだこのテストを受験できる段階に達していないと

案内されている<sup>3</sup>ことから、この尺度は CEFR で言うところの B2 以上の学習者レベルを対象としたものであると捉えることができる。この尺度ではスコアが 2 以上にならないと、結束性の観点では不十分であると評価されてしまうことから、一定以上の能力を持つ学習者にとっても、結束性の高い文章を書くことは課題であると判断できる。

#### (4) Michigan English Language Assessment Battery

続いて、Michigan English Language Assessment Battery の Composition Rating Scale を取り上げる。このテストは、主に大人の非英語母語話者に対する英語熟達度テストである。得点の切り方は以下の表 4.4 のとおりであり、10 段階の全体的評価方法を用いた基準である。

表 4.4 Michigan English Language Assessment Battery の基準

得点	基準 (結束性に関わる記述のみ抜粋)
97	there is excellent control of connection
93	the writing is well connected
87	there are few problems with connection
83	connection is usually adequate
77	connection is sometimes absent or unsuccessful
73	connection is often absent or unsuccessful
67	little or no connection is apparent
53/57/63	(there is) no connection apparent

この基準の特徴として挙げられることは、表 4.4 のとおり、77 点以下のすべての記述に、接続に関わる要素の正確な使用ができない (unsuccessful) ことに加えて、接続関係が存在しない (no connection) ことを明記していることである。正確性のみの観点で結束性が記述されている ESL Composition Profile (Jacobs et al., 1981) や EFL Composition Profile (Nakanishi, 2006) とは、この点において違いが見られる。この基準は、ライティング能力の発達の初期段階は、接続表現を使わない (使えない) 段階であることを示唆しており、このテストの尺度では、その記述から判断する限り、77 点までは、書かれた文章内で接続に関して何らかの問題点が生じているという

<sup>3</sup> TEEP を実施している University of Reading の International Study and Language Centre のウェブサイト (<http://www.reading.ac.uk/islc/TEEP/islc-TEEP-GradingSystem.aspx>) にて、CEFR で B1 以下の場合、TEEP の受験を推奨しないことが記載されている。

ことである。このテストはライティング以外には、リスニングと文法・語彙・リーディングがあり、合計3つのパートから構成されている。各パートの配点は同一で、最終的な総合得点は3つのパートの平均点となる。各パートで80点以上を取得することが、学士課程への入学の基準としている州立大学があることから、ライティングの結束性に限れば、文章の接続に関して大きな問題が生じないと判断できる77点以上を取ることが、大学入学の条件レベルと捉えることができる。大学入学をある一定の高い基準と考えると、その高い基準レベルになって初めて、ライティングの結束性に関わる基礎的な要素が使用できることになると言える。この基準からも、(3)のTEEP Attribute Writing Scales (Weir, 1990)での考察と同じように、結束性の高い文章を書くことは容易ではないことがわかる。

#### (5) GTEC for STUENTS ((株) ベネッセコーポレーション)

ここでは日本の中学生・高校生を対象としている英語力テストのGTEC for STUENTS ((株) ベネッセコーポレーション)のライティングの能力記述を紹介する。7段階からなる記述であるが、表4.5のとおり、グレード4と5において、接続語句の使用について触れられている。リーディングとリスニングのテスト結果と組み合わせて最終的なグレードが算出されるが、全体的なグレードの説明として、4は「短期の語学留学で英語圏に行き、授業についていくための英語力(高校英語中級レベル)」、5は「英語圏の2年制大学への留学に挑戦できる英語力(高校英語上級レベル)」とされている。海外での留学は通常の日本人高校生にとっては高い目標と考えられるが、留学が可能なレベルになってようやく接続語句を使って内容的につながりのある文章が書けるようになることから、日本人高校生にとって、正確な接続語句の使用は高度な能力を表していると言える。

表 4.5 GTEC for STUENTS の基準

グレード	基準 (抜粋)
5	接続語句を正しく使って、まとまりがよい文章が書けている
4	接続語句を使いながら、文のつながりがよい文章が書けている

#### (6) Canadian Language Benchmarks

次に取り上げるのはCanadian Language Benchmarksである。この枠組みはカナダへの移民に対する言語政策が出发点となっており、学習者の英語力の自己認識とその証明のために使われ

ることを目的として開発されたものである。その枠組みの中にある **global performance descriptors** の **Writing** を参照してみる。これは、12 段階から成る全体的評価基準であり、上位 4 レベル (B9 から B12) に結束性に関わる内容が記述されている。また、具体的な記述として、表 4.6 のとおり、上から 3 番目 (B10) と 4 番目 (B9) のレベルに冠詞の使用に関わる項目が見られる。上で取り上げた (1) ESL Composition Profile (Jacobs et al., 1981) でも、Good to Average のレベルになっても冠詞の使用にいくつかの誤りが生じると記述されているが、ESL 学習者のための評価基準であるこの枠組みの上位のレベルにおいても、冠詞の誤用がまだ見られることから、冠詞の正確な使用は非常に高度な言語能力を証明することがわかる。

表 4.6 Canadian Language Benchmarks の Writing の基準

レベル	レベル基準 (抜粋)
B12	excellent control over cohesion; errors are rare and minimal
B11	occasional errors are minimal
B10	occasional grammatical errors (e.g., in <u>article</u> use) still occur
B9	grammatical errors (e.g., in <u>article</u> use) still occur

#### (7) Common European Framework of Reference for Languages (Council of Europe, 2001)

Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) は、欧州協議会が開発したヨーロッパにおける言語教育または言語能力評価のための共通枠組みである。レベルは、大きく分けて、基礎段階の言語使用者を表す A、自立した言語使用者が B、そして熟達した言語使用者の C と 3 段階となっており、さらに、A1、A2、B1、B2、C1、C2 とそれぞれが 2 段階に分かれ、計 6 レベルから成り立っている。この言語能力の枠組みの中で、結束性は、pragmatic competence の下位能力の discourse competence に関わる要素として coherence and cohesion として設定されている。表 4.7 に見られるレベルごとの能力記述によると、レベルが上がるに連れて、使用できる結束装置 (cohesive device) の数と種類が増加していくことがわかる。Educational Testing Service (2010) が公開している TOEIC® のスコアと CEFR のレベルの対応は、B1 は 550 点以上、B2 は 785 点以上、C1 は 945 点以上が、最低限必要な得点となっている。TOEIC® のスコアから判断すると、大多数の日本人高校生英語学習者は CEFR の A レベルに当てはまると思われるが、このレベルは、ごく基本的な and や but そして because といった接続詞を使えるという段階であり、現在の中高生の実態を適切に表していると言えるであろう。また、

A レベルでは、接続表現 (connectors) によって結合されているものが語句 (words or groups of words) や平易な文 (sentences) という文法的な要素であるのに対して、B レベルでは、考え (ideas) や発言 (utterances) という内容的な要素となっていることは注目すべき点と言える。ライティングの全般的な能力が上がると、形式面のつながりだけではなく、内容面のつながりを意識できるようになることをこの記述は示唆していると思われる。日本人中学生英語学習者が、それぞれの文が表す内容や機能を考えずに、機械的に and や but でそれらの文を接続することが見かけられるが、それはこの結束性の基準に照らし合わせると、その学習者は A レベルの範囲の言語使用であるという評価ができる。

表 4.7 CEFR の coherence and cohesion の基準

C2	Can create coherent and cohesive text making full and appropriate use of a variety of organisational patterns and <u>a wide range of cohesive devices</u> .
C1	Can produce clear, smoothly flowing, well-structured speech, showing <u>controlled use of organisational patterns, connectors and cohesive devices</u> .
B2	Can use <u>a variety of linking words efficiently</u> to mark clearly the relationships between ideas. Can use <u>a limited number of cohesive devices</u> to link his/her utterances into clear, coherent discourse, though there may be some 'jumpiness' in a long contribution.
B1	Can link a series of shorter, discrete simple elements into a connected, linear sequence of points.
A2	Can use <u>the most frequently occurring connectors</u> to link simple sentences in order to tell a story or describe something as a simple list of points. Can link groups of words with <u>simple connectors like 'and', 'but' and 'because'</u> .
A1	Can link words or groups of words with <u>very basic linear connectors like 'and' or 'then'</u> .

#### (8) ACTFL Proficiency Guidelines

最後に ACTFL Proficiency Guidelines の Writing (2001 年改訂版) の能力枠組みを参照する。この枠組みは、学術的な言語使用環境における外国語能力を測定するために ACTFL が 1986 年に開発した枠組みがベースとなっている。4 技能すべてに 10 段階の能力記述を持ち、その内訳は、Novice (3 段階)、Intermediate (3 段階)、Advanced (3 段階)、Superior (1 段階) となっている。表 4.8 のとおり、ACTFL の基準によると、Intermediate のレベルでは、接続語句の使用は限られていることが示されており、Advanced のレベルになると、文を結合できる能力があることが記述されている。

表 4.8 ACTFL Proficiency Guidelines の Writing の基準

レベル	レベル基準 (抜粋)
Advanced-Low	combine and link sentences into texts of paragraph length and structure
Intermediate-High	connect sentences into paragraphs using a limited number of <u>cohesive devices</u>
Intermediate-Mid	demonstrate some ability to use grammatical and stylistic <u>cohesive elements</u>

次の評価例 (表 4.9) は、この評価基準に関して、ACTFL の 2010 年の年次大会で開催された The ACTFL Writing Proficiency Guidelines Familiarization Workshop (2010) の中で提示されたものである。

表 4.9 ACTFL の基準による作文例

Intermediate-High	Advanced-Low
Ana came to the United States. <u>She</u> was 18 years old. <u>She</u> didn't speak English very well. <u>She</u> was determined to learn the language. <u>She</u> signed up for classes at a community center. <u>She</u> made many friends there. <u>She</u> impressed people there with her enthusiasm. <u>She</u> impressed people with her dedication. <u>She</u> studied there for several months. <u>She</u> realized that <u>she</u> needed more advanced classes. <u>She</u> enrolled in a nearby university. The university had a lake with ducks. It had squirrels. It had intelligent professors. <u>She</u> studied there for three years. <u>She</u> graduated with honors. <u>She</u> returned to Spain. <u>She</u> was going to teach English there. <u>She</u> said <u>she</u> wanted to come back to the US someday.	Ana was 18 years old <u>when</u> <u>she</u> came to the United States. <u>She</u> didn't speak English very well, <u>but</u> <u>she</u> was determined to learn the language. <u>She</u> signed up for classes at a community center <u>where</u> <u>she</u> made many friends <u>and</u> impressed everyone with her enthusiasm <u>and</u> dedication. <u>After</u> studying there for several months, <u>she</u> realized that <u>she</u> needed more advanced classes. <u>She</u> enrolled in a nearby university <u>that</u> had a lake with ducks, squirrels <u>and</u> intelligent professors. <u>After</u> studying there for three years, <u>Ana</u> graduated with honors. <u>She</u> returned to Spain, <u>where</u> <u>she</u> was going to teach English. <u>She</u> said <u>she</u> wanted to come back to the US someday.

この 2 つの作文は内容的には類似しているが、評価の低い方 (Intermediate-High) では接続表現が使われていないのに対して、評価の高い方 (Advanced-Low) の作文では、接続表現が多く使われている。また、指示表現に関しても両方で違いが見られる。Intermediate-High の方では代名詞 she が 17 回使用されており、この文章の長さとしては、少し過剰な頻度である印象を



与える。一方、Advanced-Lowの方では12回となっており。接続表現を適切に使ったことにより、sheの使用数が減ったことが原因と考えられる。加えて、下から5行目のAfter studying there for three years, Ana graduated with honors.という文の中では、代名詞のsheを使わずに、固有名詞のAnaを再度使用していることから、代名詞の使用頻度が減っている。この文の前まではsheを用いていたが、なぜ、評価が低いもう一方の作文では見られなかった手法が、評価の高い作文の方では見られたのか。考えられる理由として、Advanced-Lowの作文のこの該当箇所においては、指示対象との距離が遠かったことにより、代名詞sheを使わずに、固有名詞のAnaを再使用したことが挙げられる。Anaの直前はafterで導かれる分詞構文を用いた副詞節であり、さらにその前の文ではSheが主語となっているが、文の後半にはuniversityを先行詞とする関係代名詞節が続いている。つまり、Anaとその前にあるもっとも近いSheの間には、2つの節が存在していることから、指示するものとされるもの間に距離が存在する。もしこの文でAnaではなくsheを使っていたとすると、指示対象との距離が長くなり、その結果、読みやすさが損なわれてしまったことが予測される。加えて、前文の後半の関係代名詞節までのすべての文では、使われてきた動詞の主語は、意味上のものを含めてすべてAna (She)であったが、この関係代名詞節での動詞(had)の主語は、初めて別の名詞(univeristy)になっている。つまり、この節だけが、内容の主体がAna (She)ではなく、別の主体(university)になっている。したがって、関係代名詞節以下は、それまでとは異質な意味内容であると言える。言い換えると、それまではAna (She)について物語文として時系列に説明がなされてきたが、この箇所だけは、Martin (1992)が言うところの単元的ジャンル(elemental genre)としての説明文が挿入されている形になっている。したがって、それまでの談話の流れがこの時点で一旦休止しているため、次の文ではSheではなくAnaを主語に据えることで、談話を本流に戻す機能を果たしたと言える。この処理は、それまで書かれた内容を考慮に入れながら各文を書き進めていたことを示す証拠であり、第1章第2節で述べたとおり、ライティングの熟達度が上がると、ライティング・プロセス上で様々な処理を実行することが可能であることを反映している。

## 4.2 ライティングの評価基準や言語能力枠組みに見る文法的結束性の総括

このように、既成の標準化されたライティング能力評価や能力記述の枠組みから判断する限り、全体的なライティング能力に文法的結束性に関わる要素が部分的に関係していることがわかる。

上述した評価基準はそれぞれ使用用途や開発の意図が異なるため、基準同士を直接的に照合することは困難であるが、大まかに一部の発達段階を個別的に記述すると以下ようになる。

- 1) 初級学習者は、**and** や **but** などの接続詞を、語句や文同士をそれぞれ接続するという文法的な機能として使う。
- 2) ある習熟度までは、結束関係が存在しない、つまり接続詞などを使わない英文が産出される。
- 3) ある習熟度を超えても、冠詞の適切な使用は難しく、また、多様な接続表現を使うことも容易ではない。
- 4) ある習熟度を超えると、文法的な接続関係だけではなく、内容的な接続関係も適切に書き表すことができる。
- 5) ある習熟度を超えると、代名詞などの指示表現は使用数が減る。

さまざまな種類の評価基準から、このような発達段階を引き出すことができたが、この段階は概略的かつ曖昧的であるため、実際の英語学習者が文法的結束性に関わる表現をどう使用するかについて、実証的に調査する必要がある。実証的な調査の結果によって、全体的なライティング能力の少なくとも一部が解明され、その結果、上で紹介した評価基準の見直しが可能となる。そして、必要であれば、基準内の記述を入れ替えたり、新しい具体的な記述がなされることが期待でき、評価基準の精緻化に貢献することができるであろう。